

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年10月号

平成十七年十月一日発行 第十七巻第十号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一七二号（毎月一回一日発行）



余生

高橋将夫

『俳句四季』九月号より二〇句

人の世のしがらみを抜け秋野かな
蘆刈の跡に並びし蘆の束
蛇穴に入る前に首立てにけり
し残しのことなにもなし下り鮎
わつと来てゐなくなりたる赤とんぼ
どれくらゐ居たか忘るる花野かな
菊人形従者に菊の衣なく
色変へぬ松や昔の艶話
秋天や鳴門の橋の下覗く
宇宙塵月下美人に降り注ぐ

二河白道釣瓶落しとなりけり
かの世へとつながる蔓をたぐりたる
落花生一粒ほどの罪と罰
尾花蛸腹をくくつてをりにけり
盆東風の闇のうねりとなりけり
大文字沈黙の時流れをり
大日の膝で雀は蛤に
竜田姫心開いてくれさうな
猪道に猪畏のあるこの世かな
朝夕の露踏んでゆく余生かな

も 桃 白

子 公 藤 近

幾千の祈りのありて蟬生まる
こぼしたる言葉かき寄せ青林檎
一つ捨ててもう一つ捨て金亀子
ひとつなくて無花果畑乾きける
ひとなくをりぬれをりにけり
灼くる砂乳房の濡れてをりにけり
炎帝に見据へられたる鬼瓦
蛇去つて親指そつと伸したる
大蚯蚓喉からからしてきたる
つばやきを金魚の背に乗せてやる
空海の風吹く中の昼寝覚

特別作品

骨壺は手捻りなりし夏の果
菩提子や見上げて影を濃くしたる
新涼や畳の縁の曲がりやう
阿波踊星の渦へとなりゆけり
同じ手で骨壺も白桃も
木の橋を月と渡りてゆきにけり
はうろくの中の地獄や曼珠沙華
月光やガラスの靴にはきかへて
毒茸やこのごろ忘れ上手にて
烏瓜にぎり締めたる虚空かな

槐安集

市場基巳

水涸れし池を飛び立つ河童虫
子別れの鴉は羽を落としいけり
蚊喰鳥渚暮るるを急ぎけり
大物になる貌をして水母浮く
牛蛙池は真昼の火照りなす

水野恒彦

ははの世の螢袋を覗きこむ
それら(ついで)しく机の上の早桃かな
水底をすべて見て来し昼寢覚
大夕焼炎心あたりより暗らみ
寝まるとき赤翡翠の緋がよぎる



石脇みはる

味はうてしんじよ食したる土用かな
炎帝や笹引きずつて通りたる
はみいだす曼荼羅華剪り捨てにけり
土笛の一つためしぬ夏の原
萱草のひとつと咲きし立石寺

竹内悦子

どんがめやひじりといふは花の名よ
螢袋抜きゐて虚空蔵菩薩
八月のいろは匂へど曼陀羅華
にんげんに耳二つあり鱧祭
凌霄花や地球を丸く落ちにけり

延 広 禎 一

猩々と象鼻杯ぞうびはい吸ふ虚空あり

象鼻杯 三茶戸寺蓮池

きらら虫伊勢物語が大好きで

大山蓮華と女心の壺

翼ある裸婦の油絵梅雨明ける

鴨の子の行方知れずよパリー祭

中 島 陽 華

猩々と出くわしてをり大賀はず

死の床に両の乳房を大暑かな

風来坊極暑を連れて去ににけり

夕闇に脚の生えたるねぶたかな

ががんぼは独眼竜の兜の上

栗 栖 恵 通 子

ぼうたんの真闇なりけり絵曼陀羅

巴里市街見下るすネットメロンかな

未伏やまぐろの冊の溶けてをり

金魚玉胎児のまなこ離れをる

盆波や襁に向きたる犬矢来

加 藤 み き

鏡板に行きあたりたる蝸牛

太柱を昇る声明朝ぐもり

盆菓子や海を掬へば色なかり

少年の顔して笑ふ生御魂

たぐりをる足にぼろぼろ灸花

大島翠木

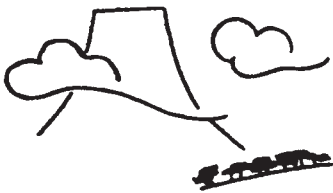
時鳥鳴きぬ鏡の左右かな
天上大風八月のエンタシス
緑陰に見えて来しもの耶蘇ならず
ゆくりなく百合の香に抱く真昼かな
河鹿鳴く山ふところの夜の膝

雨村敏子

パピルスの紙の縞目や天の川
同心円夏の鯨も海牛も
泪目の蔵六にして夏の月
何か聞こゆる鬼灯叢のあたり
父が近くなりたりたる七月の天

黒田咲子

またの名を踊り子と云ふどぜうかな
讃岐にて青田の水輪無限大
若竹の薨の反りに至るなり
先着のオーデコロンや男神
赤ワイン白ワイン暑気払ひとす



槐市集

富松寛子

青嵐や入山之書と納札
梅雨あがる雲七色の乾かな
原民喜読んで一気に氷水
大空や青柿の臍尖りたる
まつすぐに生きてきたりしソーダ水

中田禎子

帰省子のキャンパスにある少女かな
青林檎まるかじりする山の上
あめんぼう卍巴となりにける
なめくぢり水掛不動の剣かな
古本を貸しつばなしや夏の鴨

中野京子

七月の空の全開わたつうみ
夕焼けて合せ鏡の空と海
葛菓子を包む風呂敷和御魂
笹百合を手に舞ふ乙女神の森
土用芽や道しるじろと溶けはじめ

中道愛子

うしろ向きにコイン投げ入れ夏の果て
乾杯のワイングラスの音涼し
サングラスはぶしてをりし真昼かな
アイスクリームローマの旅の終りけり
ががんばのやうな少女とすれちがふ



槐集

高橋将夫選

蟬殻を置く空海の硯石

岡崎

岩月優美子

炎昼の静けさ蝶の影ひとつ

炎天にいよ鋭きダヴィデの眼

七月の星にガリレオ生きたるや

如是我聞鳥の呼び合ふ声涼し

ライオンのたてがみ束ねたき大暑

水着から太平洋のぼたぼたと

星々に水の香のする端居かな

わが翼たたむ涼しき月の辺に

玉虫の輝き不変真如かな

夏霧の山は海なり動きをり

奇岩つづく妙義の山の酷暑かな

朝ぐもり河内木綿に糊付けす

蟬鳴いて箱根関所のおどし面

夏富士を望む峠の釜の飯

枚方

谷村幸子

近藤喜子

炎天の砂州に烟のあがりをる

枚方

近藤きくえ

さういへば今日の打水こまやかに

彼岸より舞うてきたりし火取虫

金星や茅花野に石積んであり

岩船の御霊石なり銀河濃し

初蟬に雲破れたり日の太矢

初蟬に烏の嘴の開いてをり

蟬時雨見下ろしてゐる日本海

空蟬のとまる榊の葉榊の幹

水撒いて大音声の地の中へ

淋しさのかやつり草を引いてをり

まだ鳥は浮かびてゐたり昼寝覚

花うばら波の裏より夜の来る

星赤し蟬の夜鳴きとなりにけり

神の子のパイプオルガン夏の月

岡崎

本多俊子

中野京子

銀河往来 高橋将夫

高橋将夫句集『星の渦』の鑑賞、紹介御札。

本句集刊行にあたり、交流各誌に掲載いただきました鑑賞、紹介記事につきましては、逐次小誌に転載させて頂きました。ここに、改めてお礼申し上げます。

他に次の各誌にもご紹介いただいております、また丁寧なる私信も多数頂戴いたしました。重ねて御礼申し上げます。

「かたばみ」森田公司主宰）、雲取（鈴木太郎主宰）、滝（菅原開也主宰）、暖鳥（新谷ひろし主宰）、壺（金箱文止夫主宰）、南天（鈴木寛之主宰）、にれ（木村敏男主宰）、氷室（金久美智子主宰）、門（鈴木鷹夫主宰）。

高橋将夫句集『炎心』の刊行について。

本句集を十月一日付にて刊行いたしました。先に『星の渦』を編纂の折、第一句集と『星の渦』に未収録の近詠句も含めてこの十数年間を通して整理してみたいと思っていたところ、株式会社文学の森からシリーズの案内を頂戴し、これに参加したものです。

第一句集『新春』及び第二句集『星の渦』並びに近詠句（平成十六年）の中から抄出した三〇〇句を収録いたしました。（新巻抄六三句、星の渦抄一八七句、近詠抄五〇句）

次なる世界の展開に繋がってくればと願っております。

「槐集」観照

蟬殻を置く空海の硯石 岩月優美子

空海の硯石に蟬殻を置くだけの景。だからどうしたとは何も言っていない。しかし、空海、硯石、蟬殻が読者を広い世界へいざなってくれる。簡潔にして、懐が深い。

ライオンのたてがみ束ねたき大暑 近藤 喜子
たとえ小主観と言われようと、このように作者独自の感性、発想が素晴らしい作品には敬意を表さねばなるまい。暑いから髪をくくるわけだが、ライオンの鬣に及ぶとは。

夏霧の山は海なり動きをり 谷村 幸子
夏霧の山塊が海のように言う。霧が山を包み、まるで海のようにうねって流れているのだらう。迫力がある。

岩船の御霊石なり銀河濃し 近藤きくえ
霊験あらたかな岩船の御霊石から銀河濃しへの飛躍に感心させられる。視野が広く深い。

初蟬に雲破れたり日の太矢 中野 京子
別に初蟬が鳴いたからというわけではなからうが、雲間から光が差した。これを表現するのに、「雲破れ互とか百の太矢」と詠むあたり、ずいぶん大胆ではないか。

花うばら波の裏より夜の来る 本多 俊子
「波の裏より夜の来る」がうまい。次々とよせくる波。一波ごとに日が暮れていく様子がよくわかる。（以下略）